

■ オヤニラミ

Coreoperca kawamebari

(平成19年9月7日指定)

徳島県における指定状況：絶滅危惧Ⅰ類

環境省における指定状況：絶滅危惧Ⅱ類

その他の指定

徳島県天然記念物

桑野川のオヤニラミ (地域指定)

香川県版 RDB 絶滅危惧Ⅰ類



オヤニラミ

する支川岡川にも生息していたが、すでに絶滅した。本川における分布は、この岡川から上流まで及んでいたと考えられるが、現在の分布域は新野町の上流部に限定されている。

福井川 (阿南市):かつては上～下流域まで広く分布し、生息個体数も多かったが、生息域内にダムが建設されたのち激減した。

椿川 (阿南市):小河川であるためもともと生息個体数が少なかったと考えられ、分布は下流域に限定されている。生息基盤が脆弱で、減少傾向にあると考えられる。

絶滅要因

1) 生息地の消失・分断

福井川では1995年に治水目的の福井ダムが上流域に完成し、その結果、ダムの湛水域となった生息地が消失するとともに、生息地が分断された。ダム湖より上流の生息地はわずかで、ほとんど生息しないと考えられる。ただしその後、県が下流域の個体をダム湖より上流の生息可能な地域に移殖放流を行ったので、その個体が生息している可能性はある。

2) 生息地の質的劣化 (水質環境)

水質の悪化は多かれ少なかれすべての生息地で生じている。桑野川の新野町中心部付近では、家庭や事業所の雑排水の流入により、水量の少ない時期にはミズワタが河床を覆うほど汚濁した状態となる。桑野川の生息地はこの地点より上流となっていることから見て、水質汚濁が本河川におけるオヤニラミ生息の制限要因になっている可能性が高い。

福井川においても福井ダムより上流域で家庭や畜産施設からの雑排水の流入により、一部汚濁が見られる。また、福井ダム下流域では、ダム湖で生じた濁水が流入するため、ダム建設以前に比べ、明らかに透明度が低下した。これが福井川下流域においてどの程度オヤニラミの生息に影響を与えているか不明であるが、本種は一般に

種の概略

1) 特徴

本種はスズキ目ケツギョ科に属す純淡水魚である。体形が海産魚のメバルに似ていることから「かわめばる」と呼ばれたり、鰓蓋上部に眼状斑があることから「四ツ目」と呼ばれることもある。

2) 生息環境

水質の良い河川の上流域下部から下流域上部にかけての流れの緩やかな岸边やトロ、淵に生息する。動物食で、主に小型の昆虫類を食べる。

3) 繁殖生態

雌雄とも周年にわたりなわばりを作るが、産卵期にあたる5月頃には、とくに雄のなわばりは強固である。ヨシの茎や沈木、水中への根の張り出しなどが産卵基質となり、雄は複数の雌を呼び込んで産卵させる。孵化まで2週間ほどかかり、孵化したあと仔魚が卵黄を吸収するまで雄親が保護する。

4) 分布

淀川・由良川以西の本州、四国、および九州北部に分布する。おもな分布域は山陽地方である。四国では徳島県と香川県にのみ分布し、徳島県では那賀川水系とその周辺水系のみに分布する。国外では、朝鮮半島南部に分布する。

生育地と生育状況

県内で生息が確認された河川は、那賀川水系とそれに隣接した次の3水系4河川のみで、これらの水系群より北の勝浦川水系や吉野川水系には分布しない。

中山川 (那賀川水系、那賀町):すでに絶滅した可能性が高い。

桑野川 (那賀川水系、阿南市):かつては下流に合流

透明度が高く、汚濁の程度の低い河川に生息することから見て、ダム湖の水質が影響を与えている可能性はある。

樺川においては、流域人口が少ないこともあり、水質汚濁の影響はほとんどないと考えられる。

3) 生息地の質的劣化（構造環境）

構造環境とは、流路とその周辺における生息に係る空間の物理的構造を指す。これについても多かれ少なかれすべての生息地で劣化が見られる。オヤニラミは流れが緩く、隠れ場所や産卵場所となる空隙の多い場所に生息するため、河道の直線化、河床の平坦化や護岸の平滑化など河川改修の影響を強く受けると考えられる。

一部の地域では護岸に魚巣ブロックを配置するなどして、オヤニラミなど魚類の生息に配慮しているが、不十分である。

4) 過剰な捕獲

本種は一般に食用とされないため、漁業的な捕獲はない。しかし、ペットとしての流通があるため、かつてこの目的での捕獲は行われたこともあるようである。近年、どの程度捕獲が行われているか不明であるが、影響は軽微であると思われる。

5) 外来種による圧迫

桑野川および福井川においては、外来生物法上の特定外来生物であるオオクチバス（ブラックバス）が放流され、繁殖している。本種はオヤニラミと同様に流れの緩やかな場所を好み、魚類などの動物を補食するため、影響が大きいと考えられる。

オヤニラミは雄親が産卵床と孵化した仔稚魚を保護する習性がある。そのため、産卵床を防衛しようとしてオオクチバスに補食されたり、産卵床を放棄させられることがあるかもしれない。また、オヤニラミの仔稚魚がオオクチバスの幼魚に補食される可能性も考えられ、影響は大きいと思われる。

6) 放流

複数の河川において、他水系産個体の放流により遺伝的攪乱が生じた可能性がある。

保全対策

1) 分断化された個体群の存続

福井川においては、とくに福井ダム湖の上流域の生息地は範囲が狭く、生息個体数が少なく脆弱である。そのため、下流域の個体を上流域へ適宜放流して上流域個体群の存続をはかる必要がある（県により一部実施済み）。

ただし、放流に関しては細心の注意が必要である。

2) 水質環境の改善

とくに桑野川における水質汚濁の本種に対する影響は大きいと考えられる。現状では早急な対策は困難と思われるが、長期的な水質改善対策をはかる必要がある。

3) 河川改修時における配慮

オヤニラミは流れが緩く、間隙の多い場所を好む。すなわち、淵やトロ的な地形要素はできるだけ保全し、河床が横断的にも縦断的にも画一に平坦化しないよう注意する必要がある。また、隠れ場所や産卵場所となる、下流域ではツルヨシが繁茂するような州、上流域では倒木や水際から水中に張り出した根、それらの供給源である溪畔林の保全が重要である。例えば、河道を直線化せざるを得ない場合は、水制を配置し、州や淵の形成を促したり、部分的にブロック積み護岸にする場合には、魚巣ブロックを適切に施工するなどして対処可能である。

4) 捕獲の監視

現状では、捕獲の影響は大きいとは考えられないが、個体数が少なく脆弱な個体群もあることから、巡視員等による監視は必要である。

5) 外来種の導入の阻止・駆除

桑野川と福井川においては、特定外来生物であるオオクチバスの影響が懸念される。これを駆除すると共に（福井ダム湖では県が実施したことがある）、再び放流されることを防ぐために、監視や啓発が必要である。

6) 放流事業の適切な管理

適切に実施された増殖個体の放流は、希少魚類の保護に役立つ一方で、不適切な放流は、環境収容力の超過、感染症の導入、および遺伝的攪乱など、さまざまな悪影響を与える。

例えば、徳島県におけるオヤニラミ生息地は、その分布と地形からみて地史的に密接していると考えられ、それぞれの生息地の個体群が遺伝的なレベルで分化している可能性が高い。従って、同じ県内産個体であっても、増殖個体を他水系へ放流することは、個体群の遺伝的独自性を失わせ、遺伝的攪乱をもたらす可能性がある。

日本魚類学会は2005年に「生物多様性の保全をめざした魚類の放流ガイドライン」を策定し公表した。放流事業はこのガイドラインに準拠して実施することが望ましい。

（佐藤陽一）